

第2回 沼津市リノベーションまちづくり戦略会議 議事録

日時：平成28年7月14日（木） 18：00～21：00

場所：沼津情報・ビジネス専門学校 8階ホール

委員：嶋田委員、江口委員、勝又委員、大木委員、杉浦委員、高田委員、石田委員、
上野委員、小松委員、岩崎委員

- 1 沼津市挨拶（ぬまづの宝推進課 尾和課長）
- 2 沼津市講演「沼津の資源と新しい仕事」（ぬまづの宝推進課 飯塚主任、諸星主事）
（※別紙資料を参照）

3 講演「欲しいものはアプリにある」（桑原宏治氏）

横浜で野菜とお肉に特化した飲食店「バル333」を経営し、コンセプトとして地域で一番楽しくて売れているお店を目指している。関内駅の徒歩5分のところにドミナントで2店舗、いずれも2階建てで、馬車道店は13坪24席、関内店は11坪24席。

その日の朝に畑で収穫した野菜を毎日直送している。

資源とは何かと考えると、まずは人、次が物、次がコミュニケーションで、お店が成立するには客とスタッフが必要で、盛り上げるためにファンが必要である。

ファンを作るためには、顧客管理が重要である。従来の管理ではなく幸せになれる管理をやっている。幸せの管理とは、効率化、高度化と笑顔になれるもので、笑顔のためにITで顧客管理をしている。グーグル検索からたくさんのアプリを使っており、大きいレジを置かずに、iPad一台ですべてを賄いたいと考えた。レジやグーグルスプレートシートで日報管理、発注・受注、LINEはコミュニケーションツールの1つでありグループ60くらいある。エバーグリーンという会計ソフトを使い、エバーノートでレシピを共有している。

顧客管理で効率化と高度化をしていく。顧客管理で大事なものは常連を作ること。常連がお店の宝であり、データで100件の予約があったときに新規90%、残り10%がリピーターである。初めて来たお客100人のうち7人が2回目、2回目のうち24%が次の予約をし、4回目を超えると50%を超えて予約をしてくれる。知ってもらい愛されることになり、4回目を作ればその後も来てもらえるようになるので、4回目の来店を目指している。

そのために、アプリを使ってデータを細かくとって管理しており、2回目以降は電話番号を入れただけで、いつ来てくれたお客かが分かる。何名様で何を食べたかまで把握しており、初めて会ったアルバイトでも誕生日などの話ができる。

来店回数に応じて対応を変えている。手書きの名刺を渡す、来店・会計以外で個人の名前を呼ぶ、前回と同じ席に通す、来店回数に応じたサービスのランクを上げていき5回目からは2名以上のお見送りなど。

これを単純にマニュアル化することにより、意識付けができアットホームなサービスができるようになり、「食ベログ」の評価からネガティブなものが減っていく。

こうした地道なことで数字が変わり、1年前に比べると客数、常連などが増えている。

それだけではダメで、やっぱり美味しいものと喜ばれるものを売ろうと考えており、良いものを仕入れる。そのために、生産者と協力して、できれば一緒に歩もうとしている。

生産者と歩むとは、一緒に農業をやっている。生産者のプライドと顔が分かる安心を得られる。スーパーや八百屋、市場を使わずに自社で賄おうと考えて、飲食業界の野菜を変えようと考えて、八百屋を始めた。飲食店専門の八百屋で、契約農家から野菜を直接お届けする。当日の朝収穫したものをその日のうちに届ける。通常は農家と JA、仲卸、八百屋をとって 3 日から 5 日はかかり、海外のものであれば 2 週間かかる。それを農家から飲食店に届けるようにしている。

それだけではダメで、1 農家で 87 品目を作っており、欲しいものを作るようにしている。特殊食材で海外産も PB として。

これにより、自社と農家と飲食店の 3 者のラインができることで発注管理が大変になり「コレック」というアプリを使った。飲食店が発注をかけることで、農家と自社に注文がくるようになり、会計ソフトともリンクしているので請求書もくる。

最近大事にしていることは、良いものは共有すること。自分だけ勝つのではなくエリア全体の成功体験に。関内エリアで 60 店舗に卸しているが、関内全体を底上げして盛り上げる。スーパー値段にあわせて卸しているのも、原価が下がり良いものが売れて、美味しいまちと言われるようになり底上げになる。

従来のお店は、客とスタッフのコミュニケーションラインしかなかったものを、客、スタッフ、地域、生産者の関わる者すべてに増やせるかを頑張っている。

その結果、スタッフは毎日盛り上がっており、関わる人の笑顔のためにこれからも頑張っていく。

4 各委員の取り組み紹介

勝又委員：(株)きずなの代表取締役を務め、高齢者の介護サービスを市内で行っている。

デイサービス、訪問介護、ケアマネジメント、宿泊、福祉用具レンタルで 7 年目の会社。一人で立ち上げ従業員は 29 人に。本社は下香貫にあるが、仲見世商店街に支店があり、高齢者のデイサービスセンターと併設でカフェつばきを運営している。

カフェには毎日 30~40 人くらいの 65 から 80 歳過ぎの元気な暇な方が来ている。コーヒーは一杯 100 円、カラオケは歌いたい放題であり、暇な高齢者にとっては天国のような環境で、弁当を持参で来て、暇だ暇だと言いつついろんな話をしてくれる。その話を聞いていると、この人たちの力をうまく使えないかと考え、働きたいが 2~3 時間しか働きたくないとわがままを言うので、2 時間パーツを組み

合わせて高齢者の仕事を作ることを考え、(株) 高齢者を始めた。年金生活の方が働いており、カフェで給仕の仕事や託児も始めた。

私にとっては当たり前の光景で、自分の仕事は、自分や家族のため、友達たちとよい年の取り方と思って活動をしている。

高齢者だけでなく出産直後のお母さんなど、みんなが楽しく元気で、いい加減で働いていけるような環境を作っていきたい。

将来的な目標は、会社代表を務めているが数年内に引退して家庭に入りたいと思っている。最後の仕事として、誰もが見守り支援を受けられるような IT 基盤を作ろうとしており、誰もが笑って暮らせるように人と人を繋げられるような場所ができればよいと思っている。

杉浦委員：子育て応援サークルたすきの活動とリノベまちづくりに期待することを話したい。

たすきは 2011 年に未就園児を持つママ対象に、フリーペーパーの発行とママのための防災講座の企画・運営と、月 1 回の防災について考える会を開催している。

活動のきっかけは、育児の辛いことや嬉しいことなどを同じ地域に住む同世代の人たちと共有できればとの思いから立ち上げた。閉鎖的な子育て環境を、地域に見守られる環境にしていきたい。

活動実績は、ママならではの悩みや喜びをシェアできる媒体としてフリーペーパーを発行。ママバックに入れられる小さいサイズで、2012 年春の創刊から 2014 年まで 11 号発行したが、スタッフの環境も変わり現在は休刊している。ただ、今年の春に市の子育て支援課から活動が認められ、フリーペーパー「ヌマコ」を手掛けた。

フリーペーパーコンセプトは、ママに寄り添う、子供の世界を広げる、地域と一緒に歩む、ピースフルな未来をつなぐ。

もう一つの活動の軸である防災については、子供を守れるママになろうという言葉を出発点に始めた。沼津で避けられないテーマだが、日常の生活に追われてなかなか意識を継続することが難しい現状があり、一緒に学ぼう、一緒に行動しようとの思いから企画したもの。

1 年間で 4 回シリーズの開催し、今年で 3 年目を迎える。去年から、防災部というサークル内の部活を発足させ、月に 1 回勉強会を開催している。ママ目線の防災を、苦しくなくいつでもどこからでも取り組めることをコンセプトに。

3 年目に入るにあたり、先を見据えた活動ができないかと考え、東部のママ防災ネットワークを作ろうとしている。東部で大きなママサークル 9 団体あるので、連携を取ってママ同士助け合う動きをしている。

たすきの活動を通して沼津のリノベーションまちづくりに期待することは、「た

すき」の名前に込められた想いとも重なるが、子供と1対1の子育ては、まるでゴールの見えないマラソンのように感じた。本当は1人ではなく仲間がおり、駅伝のようにつながる子育てをしたいとの思いがあるが、これまではママ団体として活動してきたため、ママ同士のつながりばかり目にしていたが、リノベーションという大きな事業の括りの中で、同世代のつながりや地域の古き良きものを知ったり体感したり暮らしの知恵をつなげていくことができる。沼津のお婆ちゃんやお母さんの知恵を伝えるため、沼津の持っている魅力を掘り起こして味わいつくし、子供たちやまちの外にも伝えていければ素敵だと思う。

最後に、今回のテーマとして、ママだからできる沼津の資源と伝承ということで、お婆ちゃんから教えてもらい子供に伝えていくことはママだからできることで、食であれ干物であれこの地で取れる料理や食材、また防災などを伝えていくことができる。

もう一つがママだからつなげられる仕事の創出ということで、お婆ちゃんや先輩ママから教えてもらう講座を開催することで、新しい仕事の創出ができると思う。その中で、沼津ならではのお土産などを作っていければ面白いと思う。

小松委員：八百屋を沼津と熱海でやっているが、沼津は明日で8年目を迎える。まだ知名度は低い可能性がある。朝、畑に行って店で販売をしている。富士宮や富士、三島の野菜などを集めて販売している。最初は週4日で、2時から8時まで店を開けていた。昨年、熱海にもできたが、東伊豆のものが集まる拠点として立地した。熱海と沼津を抑えていると伊豆を抑えられることになる。

沼津は物流拠点として素晴らしい。起業する際に三島も候補地であったが渋滞も多く、沼津だと渋滞がなく効率よく動けて交通の便がよい。

八百屋は生産者との信頼関係が大事である。2時から始める八百屋で、最初は全く売れなかった。そのため近所や飲食店に配ったりして、3年間は利益が出なかった。その中で生産者との信頼関係を築き、人を雇うようになり、今は11時半から営業している。

REFSとはリアル・フード・ストーリーのことだが、食の物語とは人それぞれであり、いろんな出口を作ろうとしている。野菜だけでは弱いので、加工品にしたりお弁当にしたり、東部地域で採れたものをその日に全国宅配や業務用卸しなどで、今は需要が安定する家庭用に力を入れている。

最初はネットが使えると思い、WEBを通して写真やユーチューブを流したが、どんどん減っていき、やはり物語を伝えるのはお店が一番であると分かり、スタッフがお婆さんに話すことで、また来てくれる。

ITまではいっていないが、現場のスタッフに頼っており、スタッフも楽しく働けるようになり、お店がまちにとってコンテンツになっていく。転勤のときにこ

の八百屋のそばにという人も現れたりする。

他にもいろいろやっており、有機的にということ、野菜のほか、川のことでミズベリング狩野川や地域を知るために1年かけてスープを作る、8時間後の未来を考えるなど。地域には野菜もあり、資源としていろんな福祉などの産業もあり、有機的にすることが大事である。

21歳の時に1年間休学して39か国を回ったが、美味しいところには笑顔があり、日本の食文化はすごいことが分かり、23歳の時にバイヤーになり、27歳の時にカナダで自然の楽しみ方を学び、地域活性化をやるというよりも、単純に面白いことをやっていれば人が寄ってくることに気付いた。

29歳の時に初めて地域の魅力を知り、日本一高い山から深い海の6,000mの資源はすごいと思うので、この生かし方をリノベーションで考えてもらえればと思う。

36歳で有機的な農産物をつなげている。イベントの手伝いや商店街理事長をしており、ナイトマーケットや中央公園、川、御用邸でのイベントをやっており、これをきっかけに何かが生まれたり、始まる前の段階が重要だと思っている。

イベントはやったときは大変だが、何も残らないこともあり、そのためWEBの沼津ジャーナルの運営を始め、いろいろなカテゴリーに分けている。まだ、仕事にはなっていないが、求人情報などで事業となるきっかけを作っていければと思う。

地域にはたくさんの資源があり、複数の切り口から有機的に考えていくことと、編集と発信が出来ていなかったと思うので、そこを皆で一緒に考えていければと思う。

岩崎委員：イーজেイという会社を東京でやっている。

何をやるのかの前に、ミッションを大事にしている。何のためにやっているのかというと、人生を楽しみたいは共通してあると思うが、健康をベースにいかにか手軽に、楽しく、美味しく実現するか、ヘルシーなライフスタイルを農産物の持っている力で実現していくことをミッションとしてやっている。

内浦重須でみかんの専業農家の長男であるが、今は東京で暮らしている。農業は継がなかったが、規格外農産物の有効活用をテーマに考え、味は変わらず美味しいが見た目が悪いだけで価値が下がるもの、これを何とか活用して生産者の所得を上げられないかに取り組んでいる。

何をやっているかというと、コールドプレスジュースをメインに扱う店を、麹町と渋谷でやっている。

コールドプレスジュースは、野菜や果物からなるべく熱の発生を抑えながら抽出したジュースで体によいものである。これが東京を中心に流行りつつあり、定

番化を目指している。

やっているモデルは、生産者とお客さんと我々の三者が皆ハッピーになるもので、生産者にとっては規格外が今までより高く売れる。JAに出すと二束三文になるため、自家消費や人にあげたり廃棄するものに価値を認め、高く買っている。

我々も普通の野菜を買うよりも安く買えるので原価が抑えられる。お客さんは、通常1杯千円するものを500~600円でお客も提供しており、健康や美容に関心のある方に手の届くものにして、ライフスタイルに溶け込むようにしている。

今は東京でやっており、大学で東京に出て地元を捨てたわけだが、内浦や西浦の人は、本日も参加が少ないように閉鎖的な社会で嫌であった。ただ、出てみて三浦地区、特に内浦・西浦地区の魅力が分かった。

そのため、魅力や認知度の向上をやってみたい。農産物の認知度向上や雇用などを生みたい。同年代の者も地元に戻りアルバイトのようなことをやっている者もあり、雇用の場を作るために考えていることは、例えば1杯の美味しい体によいジュースのために全国、全世界から来るような店を作る、若しくは景観を生かしたジュース店、または生産地と消費地が近いことは魅力なので鮮度が売りのジュース工場などはどうか。

沼津に住んでいるのに内浦、西浦に来たことのない人も多いと思うので、是非、1回は来て景色を見てもらいたい。

余談だが、いま内浦がラブライブの舞台になっており、東京では盛り上げているが、こちらでは活用されずにもったいないと思っているので、時間があれば何か作りたいと思う。

上野委員：27歳から始めてカヌーのガイドを30年やっている。狩野川を使いカヌーをやっており、狩野川がカヌーの語源では？との話もありたりする。

沼津の資源である狩野川の活用について話をしたい。沼津まちなかの狩野川は、リバーサイドホテル、御成橋付近を使った活用だが、環境学習の指導に行くと、沼津だけを考えても狩野川全体は見えないため、上流や中流も一緒に考える必要があり上流から紹介したい。

沖縄の国際通りの路地裏では、若い人が古民家をリノベーションした店が通り全体にあり、交流している。

狩野川の最上流は、本谷川などが合わさり、素晴らしい場所で遊ぶことができる。

伊豆長岡に入ると富士山が正面に見えるポイントがあり、アクセスもよいためお客さんが来る。実際、川は蛇行しているため4割程度しか見えないが。

怖いところに見えるが、安全管理をしており何をやってもレスキューできる。そういう仕事をしている。参加者はみな笑顔であり、飛び込みたくなるポイント

もある。

柿田川は非常にきれいな川だが、特別なところでツアーは難しいところ。

沼津の中瀬は難所で、レスキュー態勢を取っているが初心者には難しいところ。

まちなかをスタートにしてやっているが、もっと上流で遊びたい、海に出てみたいと思わせるような作戦をねっており、いろいろな人と協力してやっている。

海にでると我入道浜、小浜などの沖合から富士山を臨めることができ、映画の舞台にもなっている。

上流から 40 何キロかけて牛臥浜にたどりつき、自分の家もここにある。アウトドアの異業種が集まった「ビーチフェス」をやっている。商売でやっている人やボランティアでやっている人がいるが、3 者で合同団体を作り、どこの旅館に持っていってもチョイスしやすいようにした。

狩野川全体を少しでも分かっただけ、新しい仕事のヒントをいただければ、私が商品にしていきたい。

(休憩)

5 テーマレクチャー (嶋田委員)

欲しい暮らしは自分で作る、ということをいろんなところで言っているが、現在、桑原さんと一緒にやっていることがあるので紹介したい。

伊勢崎町で「THE CAVE」というクリエイティブ拠点を作ろうと、昨年準備していた。建築事務所に 2001 から 2010 年まで勤めており、2005 年に横浜に事務所が移転して通うことになった。

築 90 年の横浜大空襲があっても残った伊勢ビルに出会った。横浜はクリエイティブシティ構想という補助金を使ったまちづくりをしているが、商店街の空き店舗補助のように補助が切れるとなくなるのと同じように感じ、北九州での活動のように補助金に頼らないクリエイティブ支援ができないかと思い、仲間が見つけてきたのがこのビルであった。

関内では、横浜市役所の数百億円かけた移転あり、2 万人の人がいなくなり、2 億円規模の飲食店の損失があるもの。市役所は古い建物であったため、近くのオフィスビルに間借りしているものもあり、空室が凄まじく増えていた。

数年前に飲食店が撤退してはがしたところ、壁画が描いてあり洞窟のようだったが、オーナーにまちのためになることをやるので安く貸してほしいと交渉した。まともにやるとだいぶお金がかかるので、前向きに捉えて、空間を生かして雨にぬれない外であると考えた。

ここをコワーキングスペースにし、稼いだお金でアーティストの支援をすることを組み立てたいと考えたが、補助金漬けになっていたため継続性を疑われ上手くいかなかった。そのため、横浜のクリエイティブ拠点は自立できるかということで、仲間 4 人でやること

とした。

地下に演劇やダンスパフォーマンスをやるようなスペースにして活動できるようにしたいと考え、稼ぐためにシェアオフィスを設けたようとしたが、キュービクルなどがありスペースが取れないことが分かった。

そこで、紹介されたのがバル333の桑原さんであった。オーナーは理解を示して36坪の店を5万円で貸してくれることになっていたが、話が変わってしまった。

しかし、やりたいことは変わっておらず、美味しい野菜を食べるということは、結果的に横浜のクリエイターの支援につながる。農家の自立させることにもつながり、補助金漬けのアーティスト支援を自立させることは、日本の構造的な問題解決につながると捉えた。

飲食店が稼いだお金で寄付を募り、余剰のお金でアーティストに場所を貸すことにした。同じ場所の飲食店で、そういうことができる。都会と思える伊勢崎町もチェーン店だらけであり、路面以外をどう使うかは課題である。耕作放棄地は横浜や神奈川県内にもあり、沼津だけの課題ではなく、桑原さんの農業は耕作放棄地を使ってやっている。

横浜にはたくさんクリエイティブ拠点があるが、お客さんは美味しい野菜が食べられる場所、都心生活者は好きな店と通じて食と農業に触れられる、子供たちは食育や農業体験にもなる、マルシェにもつながると訴えて、この場所を作らせてくれと言った。

桑原さんの話にあったが、スーパーで100円で売るものを農家はJAに5~10で卸すらしい。大量に買ってくれるが、少ない利幅と顔の見えない関係になる。

「THE CAVE」を通じると、農家は良いものを作れる、農家が自分で値段を決める、消費者の声を聴ける。アメリカはマクドナルドの国だと思っていたら、スーパーですごく良いものが売られている。日本もきっとそのように変わってくるのではないか。農家にしてみれば、同じものが10倍以上で売れることになる。

丁寧に作って手間暇かかるものが、飲食店とつなぐことで小規模でも成り立つのではないか。先程の桑原さんの話を聴けば、ITの技術を使えば工数をかなり削減できる。ITは世界どこでも使えるのだから、沼津での可能性もある。

空きビルのリノベーションや都市空間資源の活用は、補助金に頼らない伊勢崎町商店街のまちづくりであり、耕作放棄地や郊外での就農は補助金に頼らない農業の6次産業化になり、アーティストやクリエイターの活動する自由の場は補助金に頼らない横浜の文化・芸術の振興になる。農家と直接つながる店が増えると、美味しいものが食べられるまちになる。都心生活者には安全で美味しいものが食べられるライフスタイルが作れるということをおオーナーに説明をしたら許してくれた。

課題を解決するために事業をやっているわけではないが、何とか成り立たせようとすることで、そのまちの問題に切り込まざるを得ずに課題解決になる。

皆さんにお聞きしたいのが、沼津でどんな風に仕事をしたいか、どんな風に暮らしたいか。こんな風のできるのでは、ということをお話をもらえればと思う。

私は8年前から東京の雑司ヶ谷に住んでいるが、家と子供の保育園と学校、グランマと

いう不動産オーナーである賃貸住宅、あぶくりという妻のお店がある。木造住宅の密集地であるが、この中で暮らしている。最近引っ越したが、築 70 年くらいの木造 7DK 庭付きで家賃 18 万円。リノベは唯一ピアノを置くところの畳だけである。

最近では美味しい野菜を食べ、植物に囲まれて暮らすライフスタイルを実践しており、南池袋公園でゴロゴロしたり、妻の店に行ったりする。

雑司ヶ谷は住宅地のため、子育てをするお母さんが結構住んでおり、小学校に子供を通わせているお母さんたちは少し時間的に余裕ができ、2~3 時間働きたい人がおり、近くの面白いところで働いてみたいと思っている人がおり、妻の店でランチの一番忙しい時だけ手伝ってくれている。

都電テーブルは、全国の食材を直接集めて提供しているところで、売り上げはあるが利益が出ていないようで、調べたら食材が 38%であった。ここもランチの忙しい時だけ働いてくれるお母さんがいる。

雑司ヶ谷は借地権が多い。沼津にも多いかもしれないが、不動産の担保価値がなく、ローンがつかない。現金を持っている人しか買えない。変えるのは資産家で、築 40~50 年の建物があると売れないためすごく値段が安く、沼津よりも安いかもしれない。

最近、違法だともいわれてもいるが、FB でお金を 350 万円集め、銀行からの 600 万円と合わせて嶋田ファンドを作って物件を買って賃貸住宅にし、家賃 14 万円で貸し出した。利回りがすごく 6 年ちょっとで回収できてしまう。

新たな都市生活層が出現してきており、子育てを優先しながら空いた時間に“いい加減”で働きたい人が出てきている。女性が軽く働ける職場はよい。

また、理想の暮らしを自らの手づくりで実現させたい人がおり、白い壁や床ではないところ暮らしたいと人が出てきている。その時にぼろい物件はよい。

また、プライベートと仕事に境目がないクリエイティブワーク、先程の委員の方の多くがそうかもしれない。これにはリノベーションが合っていると思う。

日本は戦後、雇用が 46%、自営が 30%で残りが自営雇用者であったが、どんどんサラリーマンが増えていき、ほとんどがサラリーマンになってしまった。戦後 68 年を 100 としたら 170 がサラリーマンになってしまった。これは全国的なもの。

女性の就業率では、30 歳から 35 歳が大きく下がっており、サラリーマンが増えたことで結婚・子育てで下がると分析している。

男性の常用雇用者と自営業者では、自営業者は年をとるごとに割合が増えていく。女性も同じく増えていく。先程、市も説明していたが、女性のこの層はポテンシャルと言えるのではないか。

いろんなまちでリノベーションスクールをやっているのは、専門分野を基軸に、農業、小売業、飲食業、IT、クリエイティブ、教育、子育て支援、健康分野であり、いろんな分野に広がっていくような仕事の仕方が出来そうな気がする。

スモールエリアの中で、住んで、働いて、遊ぶということが沼津でできるのか、できる

としたらどんな形ならできるのか、ということをお皆さんに話してもらいたい。

6 フリーディスカッション

男性 : 話し面白かったです。前回は参加させてもらったが話が出来なかったので、自分の状況も踏まえて話したい。沼津出身ではあるが東京で暮らしていて、内装のリノベーションをやる工務店をやっている。沼津の資源を6つほど出してもらったが、自然や環境は素晴らしいが、それが日常の中に溶け込んでいるところが最大の特徴であると思う。適度のものであっても、全てのコンテンツが手の届くところにあり、外に出ると気づく機会がある。

個人的にはわがままなのでどれもほしい、満たされたいので外に出たところ、面白かったことに気づく。都市的な暮らしにも魅力があって、前職は都市と田舎の両立に憧れを持っていて、静岡で古民家の設計をやり田舎暮らしをしていたが、都市で何が起きているのかを知るため5年前に東京に移った。両方をつなぎたいとの思いがあって、東京で2拠点をつなぐ活動をしたと思っている。

わがままな暮らしは身近にあって、結婚して子供ができると、これまで自分が自然の近くにいることを感じるが、都心にいると芝生のあるところに子どもを連れていくのがしんどく感じる。暮らしの拠点をこちらにおいて東京で仕事をするというイメージが湧いてきて、両方を満たすことを目指している。東京と沼津の距離感の実現の可能性が高いと感じている。東京に住むそういう思いの持った人たちに対して、例えば沼津ジャーナルのようなWEBメディアなどで沼津が盛り上がっていることが伝わると、実現できる人につながって実現の流れが出来るのではないかと思う。

大木委員：嶋田さんが言っていた子育てママが働きたいし子供とも一緒にいたいであり、5歳の子がおり保育園ではなく幼稚園に通わせているが、仕事もしたくて、自宅でフリーランスでしている。仕事は成り立っているが、外に出て人と関わりにくいので、まちなかに子供を連れて行けるオフィスがあるとよいと思う。例えば、保育士が常駐していたり、自然教室があったり。幼稚園のお母さんは昔は働いていたが今は働いていなくて扶養内で働きたいと思う人が多く、まちなかでちょっとした仕事出来る場があれば、人が出てくるのではないかと思う。

嶋田委員：小倉魚町でアーケードをとって緑化したところある。昼間は子供があふれて、夜は大人たちがあふれるまちになった。先程、商店街の空き店舗を見てきたが、オーナーさんが使っていると言っていたので、誰かお母さんが働けるコワーキングスペースをリノベーションでやってみたい人はいませんか？

アーケード商店街の最大の魅力は、車が通らないこと。子供を連れていっても安心安全な場所であることを売りにすべきで、沼津にもそういうところがあるとよい。

高田委員：建築の個人設計事務所を長泉町でやっている。三島で一度就職し、東京に転職したあと独立して、東京と地元の2拠点で始めたが、限界を感じた。移動時間に無駄を感じて、去年、地元に戻ってきた。県東部を中心に仕事をしているが、長泉でやり始めて、自然に近いというところに住み仕事ができることを感じる。山登りが趣味で、沼津アルプスや愛鷹山があり、富士山もあり、クライミング場所もあり恵まれていて、午前中に山に行って、午後に仕事ということもある。先程、資源として海の話が出てきたが、山もジビエで鹿・猪が多い。増えすぎて畑を荒らすこともあり、なぜそうなったかという、人が狼を殺してしまっただけである。前は猟師が一杯いたが高齢化でバランスが崩れてしまった。自分も狩猟免許をとって始め結構大変だが、ただ直ぐに捕れる。先日、山でキャンプをして、捕った鹿を食べたところ、すごく美味しかった。そういうことを含めて、可能性を感じる。

石田委員：自分は昨年会社を辞め、今年から会社を立ち上げてカヤックとサップなどのツアーをやっている。テーマレクチャーがどんな風に働きたいかということだったが、辞める時にどんなことを考えたのかというと、会社員として生活が保障された中でやっていくのか、会社の中では自分のやりたいこととは違うため一歩踏み出すのか。アウトドアショップのSWENに13年ほど勤めシーカヤックなどをやっていたが、不景気でやれなくなり販売ばかりになってしまい、フラストレーションがたまりやり始めた。みんな事業をやればいいじゃないかと言うが、家庭など子供がおりなかなか難しい。それを超えられる情熱がないと難しい。どんな風に働きたいか、どんな風に住みたいのかによると思うが、楽しく住みたいと思って辞めるパターンと、辞めて好きなことをやったら楽しく住めたという両極があると思う。何年先のビジョンが見えていないと、客を食い合うことになってしまうので、先をしっかりと見据えてやるのが大切ではないかと思っている

女性：今回で2回目の参加。住んでいるのは長泉で、ずっと独立したいとっていて、コワーキングを探していたところ知り合いの伝手で沼津のアンティークドアに席をおいて、休みの日に仕事をしている。打合せなどで空間がすごく気に入って、来た人も空間がすごく良くて、下にコーヒーショップもありくつろいで仕事ができ、贅沢な作りでいい発想が生まれる空間だと思っている。沼津にもっとシェアオフィスやコワーキングが出来れば、私の周りにも入りたい女性の人がいるので、女性が好むようなものを誰かやってもらえればと思う。

男性：若者の声としてサッカーやっているが、近場で運動できる場所が少なく学校のグラウンドや小さい公園しかない。できれば各地域に公園を一つ作り、遊ぶスペースがあれば、スマホとかではなくより外で遊ぶ人が増えるのでスペースを。

男性：市内で内装業をやっている。香貫に幼稚園から高校までおり、いま33歳だが、都内にいた同級生が戻ってきて昭和58年会をやっており30~40人ほど集まって

いる。沼津をこうしたいという意見は出るが、それをくみ上げるところもないので、仲見世などでふらっと行って話せる場所があればと思う。経営者などが多くいてお金に換算できたり、情報を共有できたりすうような場所があればと思う。

女性 : 2年前によそから来て、静岡の沼津には縁もゆかりもなりもない主婦で、2歳の子の育児中。夫の仕事の関係で、沼津に一生住まないといけない状況である。最初は住まないといけないという気持ちだったが、2年住んでみて楽しく良いところで、好きになってきている。長く住むことになり、中古の家を買ったのだが、安く買えて一つ古い家を余らせている。関西の都会の海の近いところに暮らしてきて、海の近い沼津に住んでみて、都会で得ていた川辺の良さと比べ、沼津にもう少し頑張ってもらいたいとの思いがある。こんな主婦でも何かできると思う。潜在的なポテンシャルのある主婦であると自分では思っているので、誰か一緒に考えてくれたり、アイデアを教えてもらえればと思う。縁もゆかりもないので、仲間もないので、声をかけてもらえればと思う。

嶋田委員 : 仲間になってくれる人はたくさんいるので、帰りにでも連絡先を交換してもらえればと思う。人と人がつながることが何より大事かもしれない。

男性 : 年寄りを代表して話したい。76歳、60歳で起業してリフォームから入り、総合建設業で新築をやり、今は不動産業もやっている。非常に感じたのは、沼津には若い人はいるが良い人材がないとの印象である。モノ、ヒト、カネで、カネやモノはなんとかなるが、まずヒトだと思う。案としては、市のぬまづの宝推進課が仲見世の空いているところに出ればよいのではと思う。5~10万円で貸してくれるところがあるのではないか。先ほどの横浜ではないが、役所から出ているいろんな人の意見を聞くことが必要だと思う。ショールーム持っているが5千万円かかり、5年に1回替えるが簡単には売れない。安い土地を買ってモデルルームをやり、3か月に1回替える出城のような商売を、役所がやるべきである。役所の担当課は駅か港に出店を持つべき。沼津港で一番困るのは駐車場で、観光課は外に出て、法被を着て案内をすることが必要ではないか。自分が本庁の城にいて、ああせいこうせいではダメである。5年前に東北の視察に行ったが、リフォーム業者は免許がないので、安心安全リフォーム協会を作った。昨年、一般社団に県内で100社程いるが、設計士や税理士などいろんな資格をもった者がいる。

女性 : 戸田から来た。戸田村だったが平成17年に合併した。当時53歳の頃はいろんな仕事をしていて、役所から頼まれることもあり地域振興などに興味を持っていて、今は重要文化財になった松城邸を観光名所にしようと戸田どっとこむというNPO法人を立ち上げ、イベントや署名運動などやって一段落し、そこから歴史のある戸田村、プチャーチン道など、国の補助金をもらいながら戸田地域に限ってだが、広報やWEBの発信の活動をしてきている。道の駅「くるら戸田」が1年半程前にでき盛況だが、前身として港の駅を作り5年程経過したが、地域物産を

少なく、魚介類は豊富だがお土産に買って行くものがない。そこでタチバナに出会い、ジャムづくりに入り 12 年間やっているが、みな高齢になり活動がついていけなくなり、昨年度 11 月に NPO を閉じた。ただ、もったいないと思い今年の 1 月に戸田たちばな工房を作った。成功するかどうかは分からないが、66 歳だが手さぐりで頑張っており、応援してもらえればと思う。地域の資源は戸田や沼津にたくさんある。たちばなを世界一のジャムにすることを目指しているが、人づてやインターネットでオーストラリアなどからメールが来て、丁寧に対応していると世界レベルで話が来るように。数は少ないが注目をあびるところまでにはなっている。プロフェッショナルの話聞いて役に立つので、これからも勉強をさせてもらいたい。

男性 : 沼津が実家で縁やゆかりはある者です。先程、皆さんの発表を聞いて、内浦・西浦の人の参加が少ないとの話があったが、内浦・西浦で会をやったらまちなかの人は来るのかと考えるとどうか。

話しの中で感じたのが、岩崎さんのような人がよそで出ていく中で沼津の良さに気づくこともある。私もそうであった。ただ、普段見ない風景を新鮮な気持ちで見ただけで、何もなく戻って来られるのかが課題であると思った。場所がある、ミカンやお父さんが頑張っているなど大事だと思うが、支援や入り口があるとよいと思った。

リノベーションというのはデザイン変更だと思ったが、市の方に聞きたいが、そこそこ田舎、そこそこ都会というキャッチフレーズをまだ使っているのか。沼津は田舎と認めた方がよい。資源活用の中で歴史と文化が息づくまちなみとあったが、特定の施設とかに局限化されているように思う。歴史的な地名や町名などが消え去ろうとしている現状がある。区画整理で未完のまま町名変更しているところも、車が通過しやすいまちをつくらしているようなイメージで、本当の都市は一つ一つの路地を歩きたくなるようなまちで、できれば路地または路地裏の再生を。すべての人が手の届く距離にあるのか？と思った。仕事を終えて、実家のスペースに小さな店舗を始めたところで、近くのおばさんたちに寄ってくれるようになり、広い道を作るだけでなく、狭い道にも目を向けてほしい。

男性 : 薬局をやっている吉邨です。日頃から思っていること、みなさんの話を聞いて改めて思ったことを話したい。最近、沼津はイベントが多くなり、人が集まるようになった。先日の紙芝居大会には 3,000 人集まり、中央公園の食フェスにも 6,000 人が来た。以前はちょこちょこだったのがコンスタントに来るようになってきた。県外から人が来た時に、沼津っていつも何かやってるね、また来てみたいね、住んでみたいね、誰か友達に教えてあげたい、になっていてもらいたい。まちづくりというのは、観光や人が来る場所、そして住む人が増えて、そしてまちにお金落ちる仕組みを作ること、それがまちづくりや活性化だと思う。

その中でイベントはあちこちで起きるが主催者がばらばらに考えるので、同じ日に違う場所でなどバラバラになる。ぶつからずに連携していればよいが、重なると人や機材などで苦勞している現状が見られる。イベントは本当に大変なので、せっかく苦勞しているのに報われなければもったいない。報われるようにしてほしいと思い、イベントのコーディネートができる組織があればよいと思う。基本は自由にやるのが良いと思うが、機材などが取り合いにならず仕事も重ならないように、みんながやって良かったとなるイベントをやりやすくしたいと思う。沼津市の全体のイベントスケジュールが分かる予定表や掲示板のようなものがあれば、働きやすくなるのではないか。人の分散化ももったいない。イベントの最大の課題は、後につながるかどうか。イベントの時だけ人が来て、後には人が来ないではなく、後々、こんなお店があったと訪ねてもらえるような仕組みも皆でできるとよい。一般の人の意見も集められる目安箱のようなものがあればよい。イベントのやり方のリノベーションが必要なのではないかと思う。

江口委員：この会議は結構うまくいっているなど思っている。沼津にこれだけたくさん面白い方がいることが分かった。資源がたくさんあることも確認できた。会場のみなさんには欲求がたくさんあり、言い換えれば不満があることがエネルギーになっている。これは今の時代に大事で、嶋田さんの話の中の自営業が減って雇用者が増えていくことは大きな事実で、無意識のうちに考えずに生きているかもしれないという気がした。思考停止に陥っている。それは社会がうまくいっていない原因かもしれない。個人の発想が大事で、それがエリアを変え、まちを変え、国を変えていくと思っているので、今日の話で刺激を受けた方はもっとコメントをいただきたいし、今回もあと何回かあるので、また来てもらいたいと思う。

都市経営課題と言うと難しいように思うが、自分ごととして考えていくことが大事であり、自分で解決することが素晴らしいこと。

本日の会場で出た意見を4つに分類してみると、まず1つ目にこんな場所でこんな使い方ができたらというもの。例えば仲見世でコワーキングスペースがあればという話で、場所の使い方に対する提案。それから、もっと情報を発信したいというもの。沼津での暮らし方を発信していきたいという話。また、中古の家を買ったがどうしたらよいのかという話で、悩みを共有できると良いというもの。後は、仲間で話をするがくみ上げる力がないというものであった。恐らく、パイオニアの方々はくみ上げてきている人たちであり、9月に開催するリノベーションスクールでもくみ上げられることを見せることが出来ると思う。そこで自分でも出来るかもしれないということを分かってほしい。

後は、全体的な提案ということで、ぬまづの宝推進課は外に出なさいなど具体的な提案があったが、そういう意見をドンドン出していただくことで構想が立てやすくなり、議論が深まっていくと思うので、恥ずかしがらずに発言してもら

えればと思う。

嶋田委員：最初の市から話や委員や会場の話から、資源がくすぶっているとの印象を受けた。直ぐにでも繋がったら良いのにと考えたものがたくさんあり、スポーツツーリズム、アウトドアレジャーのポテンシャルはすごいと思った。それをやれば、沼津に泊まりたくなると思った。西浦のホテルや御用邸の別荘などはどうか。美味しいジビエと野菜とおばあちゃん達が作った究極のコールドプレスジュース屋など。そういった感じで繋がっていくと、沼津らしいライフスタイルが薄らと見えてくるのではないか。この会議でもっとたくさんの方が参加してくれて、次回はまちに出て会議をするようなので、沼津の未来のビジョンに結び付いていけばよいと思う。桑原さん、沼津に初めて来て、今日のこの会議の感想でも何でもどうか？

桑原さん：今日はありがとうございました。皆さんの話を伺って、環境、資源がすごくあり、ライフワークバランスを大事にしていると思った。市の方にまちを案内してもらって、オーベルジュ、宿泊型のフレンチを沼津でやりたいと思ったので、アドバイスをお願いしたい。

嶋田委員：すみませんが、本日は時間になってしまったので、次回、最初に発言をいただきたいと思います。

※ 市から今後の事業紹介

- ・8/9 リノベーションまちづくりシンポジウム vol.3
講師：青木純氏 「大家はまちの採用担当」
- ・8/30 第3回リノベーションまちづくり戦略会議
ゲストスピーカー：梯輝元氏 「沼津の不動産オーナーの役割」
- ・9/16～18 リノベーションスクール@沼津
7/15 12:00 から受講生募集開始